

令和元年6月23日現在

機関番号：37703

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21248

研究課題名(和文) 談話資料から見る北琉球奄美喜界島方言の地域変種の多様性

研究課題名(英文) Studies on the dialect diversity in Kikai Ryukyuan: with a focus on discourse data

研究代表者

白田 理人 (Shirata, Rihito)

志学館大学・人間関係学部・講師

研究者番号：60773306

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：喜界島内の5つの集落の方言を対象に、自然会話、童謡の方言訳などの一次資料の収録と、人称代名詞、呼称名詞、指示詞、疑問詞、文末詞、敬語等における方言差を明らかにするための質問調査を行った。特に、理由疑問文の特徴について詳細に記述した。また、テキストの形態素分析を円滑化するためのツールを作成した。加えて、言語資料を公開するためのホームページを作成しており、近日中にデータを公開する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、喜界島諸方言の談話資料を収集した点、また、その方言差について明らかにした点で、今後の喜界島諸方言の研究を促進するものとなる。特に、理由疑問文についての研究では、管見の限り他の日琉の諸地域変種に見られない特徴が明らかとなっている。この点で、本研究は疑問文に関する一般言語学的な研究に資するものといえる。さらに、本研究の過程でテキストの形態素分析を円滑化するためのツールを作成したが、これは助詞の融合の扱いなどの点で、日琉の諸地域変種を扱うのに適した仕様となっており、このツールを応用することで諸地域変種におけるテキストを利用した研究の促進が見込まれる。

研究成果の概要(英文)：We conducted field research on five villages on Kikai island in order to record natural conversation and songs and to clarify the dialect diversity in person pronouns, address nouns, demonstratives, interrogative words, sentence final particles, honorific expressions and so forth thorough elicitation. Especially, we described the characteristics of why-interrogative sentences in detail. We also developed a tool for facilitating morphological analyses on text data. We created a website for publishing our primary data.

研究分野：言語学

キーワード：談話資料 地域変種 琉球諸語 奄美語 喜界島 記述言語学 言語ドキュメンテーション

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

喜界島方言は鹿児島県大島郡喜界町で伝統的に話されてきた方言であり、琉球諸語圏の北東端に位置する。喜界島には30余りの集落があり、音韻面・形態面・語彙面に渡る集落差が見られるが、これまで特に形態・統語面での方言差に関する研究は少なかった。また自然談話資料の蓄積がない地点が多かった。

2. 研究の目的

研究の目的は、喜界島内の複数の集落の方言を対象に、談話資料の収集・公開を行い、談話資料からの知見をもとに、主に形態統語面の方言差を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

喜界島内の5つの集落（上嘉鉄、荒木、中里、小野津、志戸桶）の方言を対象に、50代～80代の話者計13名を調査協力者として、自然会話、童謡の方言訳などの一次資料の収録と、人称代名詞、呼称名詞、指示詞、疑問詞、文末詞、敬語等における方言差を明らかにするための質問調査を行った。また、言語資料の作成を効率化するために、テキストの形態素分析及び意味注釈付与を半自動的に生成するためのツールを作成した。

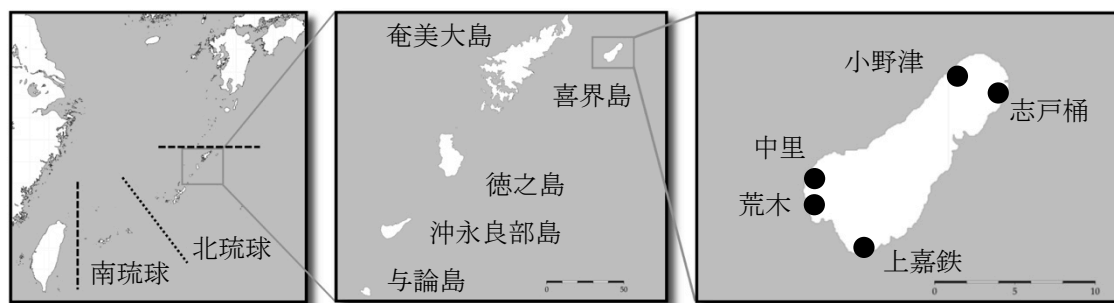


図1 上嘉鉄、荒木、中里、小野津、志戸桶集落の位置

4. 研究成果

4.1 談話資料

自由会話、場面設定会話（近所の家に鋤を借りに行く場面）、童謡「雨降り」の方言訳を録音した。今後、言語資料として論文集／ウェブサイトでの公開を予定している。

4.2 理由疑問文の特徴と方言差

理由を問う疑問詞を用いた疑問文について、他の疑問詞を用いた場合と異なる形態統語的特徴を持つこと、さらに、その特徴に方言差があることが明らかになった。例として、疑問詞を用いて聞き手に情報を求める疑問文では、通例文末助詞=jo（方言によっては=ja）が用いられるが、理由を問う疑問詞を用いた疑問文では文末接辞（-soo）が用いられる。この現象に関して、文末接辞（-soo）を用い疑問文末助詞を用いないタイプの方言（上嘉鉄など）、理由疑問詞を用いた文でも疑問文末助詞を用いるタイプの方言（志戸桶、中里など）、文末接辞と疑問文末助詞が共起しうる方言（中里）が見られた（以下①参照）。また、理由疑問詞の形式自体も、nuja からの音変化の結果と考えられる nuwa（上嘉鉄）の他、「する」の中止形（シテ）相当と考えられる形式が後続した nujaŋi（志戸桶、小野津）など、方言差が見られた（以下①参照）。以上のうち、特に上嘉鉄方言における理由疑問文に関して、論文で報告した。

① [前日の集まりに来なかった理由を尋ねて]

a. da=a nuwa k^huranta-soo? (上嘉鉄)

お前=は なぜ 来なかった-文末接辞

「お前はなぜ来なかったの？」

b. da=ja nuna(ji) { k^huranta-soo? / k^huranta-su=ja? } (志戸桶)

お前=は なぜ { 来なかった-文末接辞 / 来なかった-の=文末助詞 }

「お前はなぜ来なかったの？」

c. da=a nuna { k^huranta-soo(=jo)? / k^huranta-su=jo? } (中里)

お前=は なぜ { 来なかった-文末接辞(=文末助詞) 来なかった-の=文末助詞 }

「お前はなぜ来なかったの？」

4.2 呼称名詞と方言差

呼称名詞(人名, 親族呼称)について, 一部の方言(小野津など)では, 1 モーラ助詞が付くか否かで語末の母音長の交替(以下②参照)が見られた。この現象については学会発表で報告した。

② a. matsuu 「マツ(人名)」

b. ammaa 「おばあちゃん」

c. matsu=ŋa 「マツ(人名)が」

d. amma=ŋa 「おばあちゃんが」 (小野津)

4.3 その他の方言差

その他に, 指示詞について, 人称代名詞の属格形と複合しうる方言(小野津, 志戸桶, 荒木, ③参照, 学会発表で報告)としない方言(上嘉鉄, 中里)が見られた。また, 敬語に関して, 生産的な尊敬接辞によって派生された尊敬動詞が意志勧誘形を持つ方言と持たない方言が見られた(学会発表で報告)。加えて, 代名詞の複数形に関して-nnaa という接辞が用いられる方言が多い中で, 荒木方言では-ttaa が用いられる(④参照)など, 様々な方言差が観察されており, 今後, 学会発表・論文等で報告予定である。

③ [傘を取り違えた人に]

{ daa+(hu)re=e / daa+(hu)n hasa=a } waa mun=doo.

お前>+これ=は お前>+この 傘=は 私の もの=文末助詞

「{それは/その傘は} 私のだ」

④ a. 「(聞き手を含まない) 私たち」荒木 : wa-ttaa, 他方言 : wa-nnaa

b. 「彼ら」荒木 : ari-ttaa, 他方言 : a(ri)-nnaa

c. 「誰たち」荒木 : t^haru-ttaa, 他方言 : t^ha(ru)-nnaa

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 1 件)

① 白田理人 (2019) 「北琉球喜界島上嘉鉄方言の述語疑問詞について」『方言の研究』5 (印刷中) [査読あり]

〔学会発表〕（計 5 件）

- ① 白田理人「喜界島小野津方言の呼称名詞のプロソディー」『第14回音韻論フェスタ（2019）』
2019年3月5日
- ② 重野裕美・白田理人「北琉球奄美大島方言及び喜界島方言の尊敬動詞の意志勧誘形について」
『九州方言研究会』2019年1月5日
- ③ 白田理人「北琉球奄美喜界島小野津方言に見られる呼称末尾の母音長の交替」『日本音声学
会第32回全国大会』2018年9月15日
- ④ 白田理人「喜界島方言の動詞・形容詞について」『国立国語研究所プロジェクト「日本の消
滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」平成30年度第1回研究発表会
「動詞・形容詞（琉球諸語）」』2018年6月17日
- ⑤ 白田理人「喜界島方言の指示詞の直示用法について—小野津方言・志戸桶方言を中心に—」
『第13回琉球諸語記述研究会』2018年3月18日

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

- 出願状況（計 0 件）
- 取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/shimayumita/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者（該当なし）

(2) 研究協力者（該当なし）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。